
脳筋天使バシウムちゃん

シド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳筋天使バシウムちゃん

【Nコード】

N8995L

【作者名】

シド

【あらすじ】

ある日、ボクの家には天使がやってきた。彼の名前はバシウム。脳味噌にまで筋肉が詰まってる自称大天使だ。自分の敵である悪魔をぶち殺しに来たという彼にボクは無理やり巻き込まれ、それまでの日常を一変させられてしまう。

押しかけ天使バシウムを中心として繰り広げられるハートフルボッコ脳筋コメディです。

第1話

「亜美、事情を説明して貰いましょうか」

リビングのテーブルに座らされたボクの前で、母さんは般若面みたいなオーラを発しながらにこにここと笑っていた。

まずい。あの顔は怒り度120%以上だ。要するにマジギレ状態ということである。

「い、いや。これはボクにもよく分からなくて……」

「亜美。母さんは言い訳じゃなくて説明が聞きたいの」

「えと……それはその……」

ボクは思わず半泣き状態になってしまった。ボクは別になにもしていない。なのにどうしてこんな風に怒られなきゃいけないんだろう。

母さんは黙り込んでしまったボクの前で小さくため息をつき、リビングの端へと視線を動かした。

「えっと、そちらの方。お名前はなんて言うのでしたか？」

もそ、と視界の端で象牙色の筋肉が動いた。

「我が名はバシウム。死の神アラウンの大天使なり」

朗々と部屋中に轟く声が、びりびりと窓ガラスを震えさせた。

うちの狭いリビングの一角を占領しているのは筋骨隆々の大男だ。身長は少なくともボクの二倍以上。天井が低いせいで、頭に被った圧力鍋みたいな形の兜がごりごりこすれてしまっている。

おまけにその姿と来たら下半身は茶色い布切れを一枚巻いただけ。上半身は鉄の胸当てをつけているだけで、表を歩いたら一発で逮捕されること間違いない。

こんな格好で天使などと言われても誰が信じるのだろう。少なくとも、母さんは頭を抱えることしか出来ないようだった。

「バシウムさん……ね。職業は天使？　ウチの娘をお迎えにでも来たの？」

「答えは否だ。死すべき定めの方よ。我が任務は地獄の軍勢を滅ぼすことのみ。汝の娘に用はない」

バシウムはキングコングみたいな上腕二頭筋を太い指先で不機嫌そうになぞっていた。

よく見れば、象牙色の肌にはところどころアルファベットが刻まれている。辛うじてボクが読みとれたのは、胸の辺りに書かれた正義(justice)という言葉だけだった。

「か、母さん。やっぱりこの人どっか危ないよ。警察に連絡した方が……」

「落ち着きなさい。もしここで暴れられたら困るじゃない。ウチはまだローンも残ってるんだし」

「母さん！　ローンのことより自分と娘の命の方を心配してよ！」

小声で会話を交わすボク達の前で、ふいにバシウムはゆらりと体を動かした。

たったそれだけでフローリングの床がぎしぎし悲鳴を上げる。「新築なのに……」と切なそうに呟く母さんの声が耳に入った。

「我は地獄の軍勢との戦いに備えねばならぬ。故にこの砦を我が拠点とする」

「えっと……要するに家を明け渡せつてこと？」

「汝らを追い出すつもりはない。だがマーキュリアンの門がある以上、ここは地獄の軍勢との戦いにおける最前線となる。汝らには悪魔^{バロ}どもの戦いに協力して貰おう」

ボクと母さんは顔を見合わせた。

「ねえ、母さん。ひょっとしてこれかなりやばい状況なんじゃない？」

「待ちなさい、亜美。バシウムさんの言っていることが正しいとは限らないでしょ」

「それはそうだけど……」

「定命の者よ。我が言葉を疑うのか？」

象牙色の筋肉がずっと身を乗り出して来た。

「疑うもなにも……ボクの知る天使つてのは頭にわっかがついてるし、背中からは羽が生えてるんだ。オジサンみたいな筋肉ムキムキマッチョマンの変態じゃないよ」

「なるほど。では死すべき定め^{メテオ}の者よ。汝に我が力の一端を見せよう」

バシウムはそう言うなり、幹のように太い腕を振り上げた。

直後、叩きつけられた拳がホームセンターで買ってきたばかりのテーブルを粉々にした。真つ二つに割れたのではなく、文字通り木端微塵になるまで粉碎してしまったのだ。

「……ごめんなさい、あなた。もうすぐ私もそっちに行くわ」
「し、しっかりして母さん！ 最後まで諦めちゃダメ！」

ボクは顔を真っ青にして倒れた母さんを慌てて支えた。

「どうだ？ 我が言葉を信用する気になったか？」

「分かった！ 分かったからこれ以上、筋肉言語ボディランゲージを使うのはやめてよ！」

「これは暴力ではない。バロールどもを打ち倒すための力だ」

バシウムは全く悪びれた様子もなく言った。

こちらの話がまるで通じていない。きっと脳味噌にまで筋肉が詰まっているのだろう。

「うつつ、なんでこんな奴がウチなんかに来るんだよう」

思わず泣きたい気分になった。神様教えて。ボク達になにか恨みでもあるの？

『そもそも、どうしてこんなことになったんだっけ……』

ボクは気絶した母さんを支えたまま、この脳筋天使とのファーストコンタクトについて思い返していた。

第1話（後書き）

新連載です。筆者の頭がおかしくなってきた頃に続きを書きます。

第2話

放課後、いつも通りいっちゃんやクラスの男子とサッカーをしていたボクは夕方の門限になる少し前に帰宅した。

我が家はいよいよ先日買ったばかりの新居だ。この前まではアパートに住んでいたのだけれど、ボクが中学生になったことで一人部屋を用意して貰えることになったのだ。

「ただいまー。お母さん、ごはん！」

「おかえり……って、亜美。アンタまた酷い格好しているわね」

母さんは泥だらけのボクの格好を上から下まで眺めて小さくため息をついた。

「先にお風呂に入っちゃいなさい。それとお父さんへの挨拶も忘れずにね」

「はい！」と小気味よく返事をして、仏間に飾られていた仏壇の前に正座する。

香炉にお線香を立て、パンと掌を打ち合わせる。お寺やお墓独特の臭いが鼻先に漂ってきた。

「ただいま、お父さん。新しいお家はどうか？　お母さんは今も元気だよ。たまに少し寂しそうな顔してるけど」

後半は小声だった。母さんに聞かれたら頭に拳骨をされてしまう。仏壇の前に置かれた父さんの写真をじっと見つめた後で、ボクは立ち上がった。

お風呂と食事を終えた後で、ボクは流し台で食器を洗い始めた。
我が家の家事は分担制だ。ボクは皿洗いやゴミ出し、洗濯やお風呂の掃除などを担当している。

働き者の母さんは食後のお茶で一息ついた後、バインダーを片手に席から立ちあがった。

「それじゃ、私はちょっと佐々木さんのところに回覧板まわしてくるから」

「いつちゃんどこ？　じゃあ一時間は帰ってこれないね」

「人をお喋り魔みたいに言わないの。ちゃんと大人しくお留守番してるのよ？」

「分かってるよ」と少し不機嫌そうに答える。子ども扱いされるのはあまりいい気分じゃないのだ。

皿洗いを終え、母さんが家から出かけた後で、ボクは自分の部屋へと戻った。

我が家は二階建てで、一階にリビングと母さんの部屋。その上の階にボクの部屋がある。

二階にはもう一つ空き部屋があつて、母さんはそこをお客さん用の部屋にするつもりらしい。もつとも、今は荷物が詰め込められているだけの単なる倉庫と化しているのだけれど。

「あ、そうだ」

部屋の扉に手をかけたところでふと思い出す。そういえばケータイの充電器がまだ荷物の中だった。

ボクは部屋の前で引き返すと倉庫の扉に手をかけ、一息に開け放った。

途端、視界一杯に飛び込んで来たのは目の覚めるような鮮烈な青の色だ。

扉の向こうはまるで異次元に取り残されたかのように、青い光によって包まれていた。

「……なにこれ」

ボクはぼかんとした表情で、青白く光り輝く空間を見つめた。

上手く頭が回らない。朝に見た時はこんなことにはなっていないかったはずなのに、一体お昼の間に何が起きたのだろう。

クエスチョンマークを浮かべるボクの頭上から、象牙色の豪腕がぬつと姿を突き出たのはそのすぐ後のことだった。

「着いたか」

重々しく、お腹の底に響くような声だ。

最初に見えたのは腕だけだった。次にアルファベットの刻まれた肩が青白い光の中から姿を現し、その次にはバケツ型のヘルメットを被った頭が、丸太のように太い首が、盛り上がった筋肉に覆われた背中が、まるで扉を潜るかのように青白い光の断面から飛び出て来た。

「な、なに君……」

白い、見上げるほどの巨人だ。ボクは首が痛めながらも、そう尋ねた。

彼は、答えた。

「我はとこしえに戦禍に抱かれるものなり。我は神々の争いにおける最後の戦士であり、あらゆる人の子の文明を通じてエレバスを縦横に転戦し、必要とあらば地獄そのものに下り地獄の軍勢の砦を攻めるものである」

……なにを言っているのか全然だよう。

ともあれ、それがボクの聞いたバシウムの、自己紹介とは思えないような自己紹介だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8995/>

脳筋天使バシウムちゃん

2010年12月10日02時02分発行